

一念発起で柿作りの

エキスパートに

堀 嘉仁

ほり よしひと (43歳)

― 五條市西吉野町 ―



柿の王様「富有」

柿王国に育ち、 もがく日々

西吉野町(旧西吉野村)に一歩足を踏み入れると、柿博物館の表示、カッキーの愛称で親しまれている柿キヤラクターの看板など、いたる所に柿にまつわるものを目にする。町をあげて「柿」を盛り上げているのが伝わってくる。そんな西吉野町の柿農家の三代目として生を受けたのが、今回の「がんばる奈良の農業者」、堀嘉仁さんである。

堀さんは幼いころから両親の手伝いはしていたものの、家を継ごう、継ぎ

たいと思ったことはなかった。ただ、ほかに就きたいと思う職も特になかった。家業を継ぐことにしたのは、二人兄弟の長男だったため、なんとなく自分が継ぐのだろうと思っていたからだ。そのため、県の農業大学校に進学し、卒業後すぐに家業に就いた。こんな状態では仕事に熱意が生まれるはずがない。毎日、言われるままに仕事をこなし、もがく日々が続いた。

きつかけを力に一念発起

転機が訪れたのは、30歳を目前にしたときだった。

家業に携わったものの、ずっと「継ぐ」ということに抵抗を感じていた。その上、二代目の背中には偉大で、息子の目から見ても父親の作る柿のレベルは抜きんできていた(平成16年には、その実力が広く認められ、第34回日本農業賞の大賞に輝く)。三代目として、何か二代目とは違うことができなかつとずと考えていた。

あるとき思い出したのが、中学時代に目にして驚いた柿のハウス栽培のこと。堀さんが中学生当時、ハウス栽培は全国的にも珍しく、彼が目にしたハウス柿は「全国で最初に渋柿のハウス栽培」を行った生産者のものだった。

さらに、何の縁か、学生時代にはその生産者のもとで2ヶ月間の農業研修を受ける機会を得た。ただそのときは、ハウスでの作業は暑くて大変だし、自分にはできないと感じたという。

にもかかわらず、「今」から脱却したい思いや反発心などが原動力となって、未知のハウス栽培に自身一人で乗り出す



ことを決意する。

ハウスを建てるには資金がいる。ハウス栽培のためのノウハウがいる。それらすべてを一人で動かし出すところから始まった。

借金をして資金を調達し、その頃広まりつつあったハウス栽培の先輩たちに教えを請うた。父親には病虫害防除などを相談しても、「俺にはハウスのことは分からん」と言われた。

こうして一人ですべてを背負うことで、徐々に責任感が芽生え、仕事に打ち込む姿勢に変化が生まれた。あんなに苦手だった朝も、難なく起きられるようになった。

次世代につなぐ柿産地

もともと家業が嫌だったわけではない。ただ、何か引つかかっていた。その引つかりが取れたとき、堀さんは一気に動きを加速させた。柿に対する思いはどんどん膨らみ、仕事やさまざまな活動に打ち込んでいく。

なかでも、西吉野町柿部会の活動には熱心で、約10年前には自ら同年代の仲間と一緒に部会に掛け合せて青年部を発足させる。何か催しがある度に、青年部が率先して柿のPRに出かけた。

さらに、今なお続く柿の祭典「柿の



カッキーと子ども達 (柿の里まつりで)

里まつり(毎年11月)をスタートさせる。青年部が中心となって、柿の種飛ばしやカッキーとのじゃんけん大会などを催す。柿にまつわることからそうでないことまで、さまざまな内容にすることで、とにかくまずは西吉野に来てもらい、柿のことを知ってもらう機会を作った。その努力が実り、今では秋のイベント開催時におよそ5000人も人がやって来る。

「自分にも息子がいるが、家業を継げとは思わないし、言わない。一度きりの人生なので、自分のやりたいことをやればいい。ただ、息子が自分の働く背中を見たととき、『面白そうだ! やつぱりやりたいなあ!』と感じてくれるように頑張っています」と話す堀さん。



柿の里まつりでのにぎわい

家業に就く中で悩み、もがき、自身の力で道を切り

開いてきた。決して多くを語らないが、自分と向き合い、壁を乗り越えてきた彼の言葉は重みに溢れていた。

奈良県の柿は

みんながすばい!

昭和の初頭から柿の一大産地となった五條吉野地域一帯。当時、県内の柿生産面積700haの内、500haを同地域が占めた。その中心は旧西吉野村で、現在は一望1500haに及ぶ全国有数の柿集団産地である(県内総面積1800ha)。また、奈良県全体で年間2万2千t以上の柿が生産されており、これは和歌山県に次ぐ全国第二位の規模。国内の総生産量の約1割にあたる。そんな県内はもちろん、全国的にも今も変わらず西吉野町が柿産業を牽引していて、その牽引者の一人が今回の堀さんである。



柿のハウス